

# 物語女流文壇史 下

巖谷大四



中央公論社

谷大四

語女流文壇史  
下

物語女流文壇史 下

昭和五十二年六月二十日印刷  
昭和五十二年六月三十日發行

著者 巖谷 大四

發行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一  
電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四  
©一九七七 検印廃止

物語女流文壇史 下

目次

## 昭和女流文壇の開花

- 1 大田洋子と「人間襦袢」
- 2 「孔雀」を振舞う女（真杉静枝）
- 3 天才文学少女の出発（宮本百合子）
- 4 宮本顯治との結婚
- 5 あざやかな別れ（宇野千代）
- 6 網野菊の文学
- 7 「放浪記」の作家（林美美子）
- 8 体あたりの人生（平林たい子）
- 9 帯留で鉢巻をした女性
- 10 佐多稲子の一筋の道
- 11 円地文学の妖しさ
- 12 終戦前後に逝った作家（矢田津世子、辻村もと子）

## 戦後の女流文壇

- 1 幸田露伴と文
- 2 女流初めての芥川賞作家（中里恒子）
- 3 芝木好子の持味
- 4 大原富枝という女
- 5 忘れ得ぬ「小指」の人（梶千代）
- 6 戦後初めての芥川賞受賞（由起しげ子）
- 7 小山いと子と調べた小説
- 8 佐多文学と畔柳二美
- 9 三浦朱門との出合い（曾野綾子）
- 10 作家と社会
- 11 才女時代（有吉佐和子）
- 12 神彰との出合い
- 13 たった一人の駆け落ち（瀬戸内晴美）
- 14 仏縁

## 女流文学者会

- 1 戦前のあゆみ
- 2 『婦人文庫』の発刊
- 3 女流文学賞としての出発
- 4 現代異色の作家たち（原田康子、倉橋

由美子、河野多恵子、富岡多恵子、大庭みな子、萩原葉子)

あとがき

.....

227

参考文献

.....

229

索引

装釘 巖谷純介

物語女流文壇史  
下





## 昭和女流文壇の開花

### 1 大田洋子と「人間檻樓」

林芙美子が「放浪記」を連載しはじめてから十カ月後の、昭和四年六月号の『女人芸術』創作欄のトップに、大田洋子の文壇的処女作「聖母のゐる黄昏」が載った。

大田洋子は、文学辞典でも、文学全集の年譜でも、明治三十九年十一月生れとなっているが、本当は明治三十六年十一月生れである。つまり三年サバをよんでいたわけだ。ということを見出したのは、晩年の大田洋子の秘書を勤め、昭和四十六年に「草篋——評伝大田洋子——」という本を出した江刺昭子氏である。江刺氏のこの本は、実にたんねんに調べ上げた上で、客観的に大田洋子という人物を浮き彫りにしたすぐれた評伝である。しかしこの本は今手に入りにくいと思われるので、この本を基として、他の諸家の意見も加味して紹介することにする。

大田洋子（一九〇三、六三）は明治三十六年十一月二十日、広島県山県郡原村に生れた。本名初

子。

「洋子の母トミは、明治十年六月七日、横山種次とツルの三女として生れている。生家は、広島県山県郡都谷村の油問屋。二十歳ごろ、山県郡の官吏をしていた二十歳位年上の小泉金八と結婚し、長女清子を生む。まもなく離縁になり、長女をおいたまま横山家に帰る。明治三十五年ごろ、隣村原村の中農地主福田滝次郎に乞われて嫁ぐ。ここで、三十六年十一月二十日、長女初子（洋子のこと）を生み、三十八年六月には長男久、四十一年三月には次男一三をなす。しかし四十三年末には道楽者の福田滝次郎に見切りをつけて、再び出戻りとなる。このとき長女初子は親戚の大田幸助、カメ夫妻（広島県山県郡加計町大字津浪甲一七〇九番地）に養女として移籍し、実家に連れ帰る。長男久は、福田滝次郎の家督を継いだ滝次郎の弟耕作の許に預けられ、次男の一三は、親戚の森田家の養子となる。横山家に帰ったトミは雑貨屋を細々と営むが、二年後、隣の佐伯郡玖島の地主で、六歳年下の稲井穂十に見染められて結婚。このとき連れ子として初子（洋子）を連れていく。先方にも、先妻の子供鉄操、鉄鳴の二人がすでにおり、翌年には、長女雪枝、次いで次女礼子、三女一枝を生んで複雑な家族構成となる。稲井家は、漸くトミの落着く場所となり、昭和九年穂十が結核で亡くなったあとは、一枝や洋子の家を転々として暮し、昭和三十四年、東京鷺宮の大田洋子の家で死ぬ。享年八十四歳」（『草篋』）

まことに「複雑な家族構成」である。そしてそれが、洋子の生涯にも常に暗く重い影をなげかけたのである。

義父穂十は学者肌の読書家で、漢学の素養が深く、文学に理解があった。洋子は小学校高等科

に入った十三歳の頃から、義父の本棚にある文学書を濫読しはじめ、ハイネ、ホイットマン、田村俊子、石川啄木などを愛読した。それはひとつには義父と母との間に次々に子供が生れ、両親の愛がその方に移ってしまった淋しさをまぎらわすためでもあった。

大正七年、広島市進徳実科高等学校に入り、憧れの広島市に出て、親戚の柴田重暉の家から学校に通った。この頃から、宝塚少女歌劇に入ろうか（この頃の少女には宝塚少女歌劇にあこがれるものが多かった）、小説家になろうかと迷い、市内の新劇グループに加わって芝居をやったり、女性ばかりの同人雑誌のメンバーに入って短歌や小説を書きはじめていた。

大正九年、本科から研究科に進んだが、この頃、『中国新聞』に投稿した作品が掲載され、作家になる気持を強く持った。

大正十一年、研究科を卒業した翌年、江田島村の切串女子裁縫補習学校の教師となって島に渡った。しかし、裁縫の教師として赴任したのだが、綴方ばかり教えた。そのために校長から「人間としてはよいが、教師としては不資格だ」と言われ、二年で辞めた。

広島に帰ると、熊平金庫株式会社のタイプライター教室に通って和文タイプを修得し、県庁の雇員になった。そのかたわら、同人雑誌や新聞に創作を発表することを続けた。その頃、県庁には、和文タイプの出来る女性は二人しかいなかった。それだけに目立った。『中国新聞』の記者がそのことを新聞に書き立てた。洋子はとくに美貌で、妖艶なところがあって人の目を引いた。新聞記者がたわむれに言い寄ることが多かった。洋子はそれを適当にあしらっていた。

ある日知合いの新聞記者から、新しく県庁誌になったという『毎日新聞』の藤田という記者を

紹介された。藤田は混血児のような顔をしたハンサムな男だった。藤田は「ときどき中国新聞で御作を拝見しています。なかなかいい感覚を持っておられる方だと属目しておりました」と言った。

洋子の胸は、作品をほめられて、早鐘のようにはずんだ。藤田は文学について幅広い知識を持っていた。とくに当時評判になりはじめていた横光利一、川端康成らの新感覚派の作品を殆んど読んでいた。洋子は藤田に畏敬の念を持ち、心惹かれていった。

何度か逢瀬をかさねるようになり、やがて藤田は、洋子の下宿先の叔父夫婦に膝話談判のようにして、洋子を奪っていった。同棲して三週間目に、藤田は、既に自分には籍の入った妻があり、二人の子供がいることを打ちあげた。洋子は奈落の底につき落された思いで、怒りと悲しみに打ちのめされ、泣く泣く、迎えに来た母と人力車で玖島村へ帰っていった。

しかし、藤田からは、毎日、帰ってほしいという手紙が来た。……妻とは正式に離婚する……僕はお前だけが命だ……地球のどこまでも追って行く……僕はお前がほしい……とかき口説いた手紙であった。

結局、藤田の口説きに負けて、洋子はまたずると同棲してしまう。

「そして、二人が初めて出逢ってから四年め、漸く藤田の妻が離婚届に印を捺した。二人は晴れて夫婦になったのだった。けれども歓喜はどこへ去ったのか。この日を待っていなかったといえないのに、ぼろりと掌の中から大事なものがぬけ落ちたように洋子はぼんやりとその事実を見た。結婚披露の会食もして二人の新しい生活が始まったが、不思議な影が二人を支配していた。藤田

の身内の者の非難の眼も洋子にはこたえた。そのうち、別れた妻が泣き喚きながらとびこんできて、子供二人をおいていく。そのときは洋子自身藤田の子を孕んでいたが、藤田の母も同居する家庭は、洋子にとって安住の場所とは思えなかった」(同前)

そして洋子は女兒を生んだ。夢子と名付けた。しかし、その子供を藤田の許に残して、洋子は、産後五十日目に大阪へ出奔してしまった。

大阪から洋子は、当時の流行作家菊池寛に窮状を訴えた手紙を出した。大様な菊池は、見も知らぬ文学少女の洋子に五十円送った。その頃菊池寛は、『文芸春秋』の発刊が大いに当って流行作家であると同時にジャーナリストとしても羽振りをきかしていた。洋子は喜び勇んで上京した。

洋子は菊池家に落着いた(その頃菊池寛のところには、そんな文学青年がごろごろしていた)。洋子は菊池の原稿を口述筆記したり、芥川龍之介や里見淳の所へ原稿を取りに行ったり、『文芸春秋』記者兼秘書のような役をした。小遣もくれたし、小説も指導してくれた。ところが、

「ある夜、洋子の部屋に菊池がしのんできて、不真面目な行為に及ぼうとしたというのである。稲井鉄鳴氏(註々洋子の義弟)がいう。『うちの親父が、菊池のところから逃げ帰った姉に、せっかく文芸春秋社に入ったのになぜやめた、と聞きましたらね、姉が言いましたよ。菊池寛が夜這いに来たからやめた、小説家はいやらしい、だから文芸春秋社にはおれん、とね。私も居る前で、親父にはっきり言いましたよ』。この話の真偽は確めようもないが、当時、菊池の周囲にいた秘書役や記者の女性達のあるものがいつのまにか、菊池の愛人の立場に変わっていったことを思えば、うなずける話ではある」(同前)

こうして洋子の、第一回目の東京行は失敗に終わった。洋子は苦い思いをかみしめながら、再び藤田の所へ舞い戻り、泥沼の生活に入っていた。しかし、藤田との生活は一年と続かなかつた。文学に向う気持を捨てきれなかつた洋子は、今度こそ藤田との生活を清算して、再び出奔、尾道、大阪方面で女給やダンサーをしながら、ひたすらに書き続け、中央の雑誌に投稿した。そこへ朗報が来た。

「昭和四年の春のことだった。前に送っておいた『聖母のある黄昏』という二十五枚の原稿が、婦人文芸誌『女人芸術』に採用になったという知らせで、採用の通知といっしょに主宰者の長谷川時雨の手紙も添えてあり、それには次の原稿依頼が認めてあった」(同前)

長谷川時雨は、洋子の才能を高く評価して、しきりに上京をすすめた。洋子は、以前の苦い経験もあったので、しばらくためらつたが、長谷川時雨の熱意に感動して、昭和五年五月、再び上京し、本郷に下宿した。『女人芸術』のメンバーが温く迎えてくれた。洋子の第二の文学的出発がはじまつた。

当時の『女人芸術』は、主宰長谷川時雨、編集部に小池みどり、熱田優子、顧問格に生田花世、小寺菊子がついて、執筆陣は、評論では平塚らいてう、山川菊栄、神近市子、創作では林芙美子、平林たい子、窪川いね子、真杉静枝、矢田津世子、大田洋子、辻山春子、若杉艶子、戸田豊子、田島準子、横田文子、戸川静子、葵いつ子、村田千代、松井締子らがついたが、中で、妖艶さと美貌で目立ったのは、真杉静枝と矢田津世子と大田洋子であつた。

『女人芸術』は洋子の作品をよく載せてくれたが、あまり評判にはならなかった。それに『女人芸術』に書いてあるだけではとても生活のたしにはならなかった。その『女人芸術』も昭和七年に廃刊となり、洋子は寄りどころを失い、生活に窮した。どこからも作品の注文がなく、次第にデカダンな生活に陥っていった。

この頃、洋子は落合に移って材木屋の二階に間借りしていたが、毎日のように新聞記者が泊り込んでいるとか、ある雑誌社の主が、朝、寝巻姿で出て来たとか、とかくの噂が立った。美貌と妖艶さを売りものにした捨て身の生き方をしていたのだった。

そんなふうに入り出した男の中に、元改造社の黒瀬忠夫がいた。黒瀬は学生時代マルキシズムの洗礼を受け、改造時代は「戦旗派」だった。それがもとで改造社を誅<sup>くち</sup>られ、自分で「時代社」を起したが成功せず、ぶらぶらしていたが、昭和十一年の末頃から洋子と同棲した。しかしそれも一年と続かなかった。

失意の底に陥った洋子は、心機一転、『朝日新聞』の懸賞小説に応募する決意をかため、その取材のため、昭和十三年の秋、天津、北京に渡った。それをもとに書き上げた「桜の国」が、昭和十五年一月、見事に一等入選した。その前年の十四年二月には「海女」が『中央公論』の懸賞小説に一等入選していて、洋子は漸く文壇に花開いたかに見えたが、時期が悪かった。やがて日本は太平洋戦争に突入し、二年目には敗戦の色が濃くなり、物資不足で紙の入らなくなった雑誌は次々に休刊となり、作家はその発表の舞台を失っていった。

昭和二十年一月、洋子は、空襲の激しくなった東京を逃れて、広島市白鳥九軒町の義妹中川一



枝の家に疎開したが、その家の二階で就寝中、原子爆弾の被害に遭い、右頬と耳に軽い傷をうけ、猿猴川の川原で野宿したあと、佐伯郡玖島に逃れた。

「玖島に逃れた洋子の傷はまもなく恢復するが、八月二十日をすぎた頃から、洋子の周囲の人々に奇妙な現象がおこり始める。広島から来ていた戦災者が次々と死にはじめたのである。ほとんど外傷らしいものなかった人々が、ある日突然、発熱と下痢を訴え、頭髮が抜け、血を吐いて死ぬ。当日広島市に居なくて、翌日家族を捜すために市街を歩いたものまでが同じ症状を呈して死んでいく。急性原爆症である。そして、あの日広島に居た者は皆死ぬ、という噂が流れてくる。洋子も死の恐怖にとらわれると共に、作家魂がよみがえってきた」（同前）

そしてその年の暮、障子紙やちり紙、手あたり次第の紙（当時原稿用紙などなかった）に、つぶさに見た原爆の惨状を、しゃにむに描きあげたのが「屍の街」であった。洋子はそれを雑誌『中央公論』の編集部に送ったが一向に掲載されなかった。

「洋子の原稿は、雑誌『中央公論』編集部宛に送られてきた。当時、『中央公論』編集長は畑中繁雄氏で、海老原（光義）氏は部員だった。海老原氏は『屍の街』のナマ原稿を読んだ。そして『これは、証言として大変なものだ、後世に残る大文学だ』と思ったという。早速編集長の畑中氏に感動を伝えたが、畑中氏は『いまの状況では（屍の街）の掲載は無理だ』と言って、海老原氏をがっかりさせた」という事情であった。「いまの状況」というのは占領下の出版事情のことである。

それは三年後、漸く単行本として中央公論社から刊行されたが、それも占領軍の検閲で要所を